

メッセージアウトライン サムエル記第一29:1～11 「主は生きておられる」

[1]「ペリシテ人は全軍をアフエクに集結し、イスラエルはイズレエルにある泉のほとりに陣を敷いた」

いよいよペリシテ軍とイスラエル軍の全面戦争が始まる。ペリシテ人の全軍が集結した「アフエク」はガリラヤ湖の西約40キロメートルの地。さらに西に約10キロメートル進むと地中海に出る。ここはイスラエルのアシェル部族の領土であったが、実質的にはペリシテ人の支配下にあったのであろう。「イズレエル」はアフエクの南東約40キロメートルの地でイッサカル部族の領土内にあった。

そこにある「泉のほとり」にサウルの率いるイスラエル軍は陣を敷いた。

ここからわかるように、戦場となった地はイスラエルの北部である。ペリシテ軍は地中海沿いの平野を北上して、イスラエルの軍事力の手薄なガリラヤ地方から南下しようとしたのであろう。

[2]「ペリシテ人の領主たちは、百人隊、千人隊を率いて進み、ダビデとその部下は、アキシユと一緒にその後続いた」

ペリシテは都市国家であり。北からアシュドデ、アシュケロン、ガテ、エクロン、ガザと五つの大きな町に分かれており、それぞれに領主(首長、王)がいた。そしてそれぞれが百人隊、千人隊を率いて進み、最後にガテの王アキシユの軍とダビデとその部下たちが続いた。

[3]「ペリシテ人の首長たちは言った。『このヘブル人たちは、いったい何なのですか。』アキシユはペリシテ人の首長たちに言った。『確かにこれは、イスラエル王サウルの家来ダビデであるが、この一、二年、私のところにいる。私のところに落ちのびて来てから今日まで、私は彼に何の過ちも見出していない。』」

アキシユ以外のペリシテ人の首長たちはダビデとその部下を見とがめて、アキシユにも文句を言う。これに対してアキシユは、ダビデたちはサウルのところから落ちのびて来た者であることを伝え、今日まで彼に何の過ちも見出していないと弁護する。

[4-5]「ペリシテ人の首長たちはアキシユに対して腹を立てた。ペリシテ人の首長たちは彼に言った。『この男を帰らせてほしい。あなたが指定した場所に帰し、私たちと一緒に戦いに行かせないでほしい。戦いの最中に、われわれに敵対する者となつてはいけない。この男は、どのようにして自分の主君の好意を得るだろうか。ここにいる人たちの首を使わないだろうか。この男は、皆が踊りながら、【サウルは千を討ち、ダビデは万を討った】と歌っていたダビデではないか。』」

この歌はペリシテ人たちの間にも広く伝わっていたようである。その歌に歌われていたダビデが今、自分たちの目の前にいる。アキシユ以外の領主たちが警戒したこ

とは当然であろう。彼らはダビデが戦いの最中にイスラエル軍に寝返りして、ペリシテの領主たちの首を使って、主君サウルの好意を得るようになってはいけなないとアキシュに強く抗議した。それは当然のことであろう。以前にもそのようなことがあった。
→14:21~22

[6-7]「そこでアキシュはダビデを呼んで言った。『主は生きておられる。あなたは真っ直ぐな人だ。あなたには陣営で、私と行動をともしてもらいたかった。あなたが私のところに来てから今日まで、あなたには何の悪いところも見つけなかったからだ。しかし、あの領主たちは、あなたを良いと思っていない。だから今、穏やかに帰ってくれ。ペリシテ人の領主たちが気に入らないことはしないでくれ。』」

「主は生きておられる」は、イスラエルで誓いをするときの慣用句であるが、異教の神を信じるペリシテ人のアキシュがこのことばを用いたのは、ダビデを説得するためにあえて用いたと考えられる。しかしこのような形でダビデを帰す結果となったのは、まさに主が生きておられることの証拠なのである。もし、ダビデがそのまま進んでイスラエル人との戦いに行ったら、彼はどのように行動したであろうか。ダビデの心中は穏やかではなかったであろう。サウルにいのちを狙われ、ユダの荒野を逃げ回っていたとき、彼は何度もサウルのいのちを取る機会があった。しかし、彼はサウルが主に油注がれ、主によって王として立てられた人物であったがゆえに、決して殺そうとはしなかった。しかし、今回のような全面戦争では、そのようなことはできないであろう。ぐずぐずしていたら自分が殺されてしまうかもしれない。また他のペリシテ人の領主たちが言ったように、イスラエル側に寝返るなら、今まで自分を信用していたアキシュの顔をつぶすことになる。それゆえ、これはどちらに転んでも難しい状況である。そんな時に、アキシュ自身から、他の領主たちの意見のゆえに、戦場から帰るようにとダビデに告げられたのである。

[8]「ダビデはアキシュに言った。『私が何をしたというのですか。あなたに仕えた日から今日まで、しもべに何か過ちでも見出されたのですか。わが君、王様の敵と戦うために私が出陣できないとは。』」

ダビデは、「私が何をしたというのですか。……何か過ちでも見出されたのですか」と自分の潔白性を主張しつつ、アキシュに探りを入れている。

そして、ここでのダビデの返事は徹底してあいまいな、どちらにでも取れることばである。「わが君、王様」とは誰か。アキシュかサウルか。「敵」とは誰のことか。アキシュかサウルか。

[9-10]「アキシュはダビデに答えて言った。『私は、あなたが神の使いのように正しいということを良く知っている。だが、ペリシテ人の首長たちが、【彼はわれわれと一緒に戦いに行ってはならない】と言ったのだ。さあ、一緒に来た自分の主君の家来たちと、明日の朝早く起きなさい。、朝早く、明るくなり次第出発しなさい。』」

アキシュは滑稽なほどダビデの肩を持ち、ダビデが神の使いのように正しいと言う。

しかし、他のペリシテ人の首長たちの強い意見のゆえに、拒むことはできないので、明日の朝早く帰るようにと告げた。「一緒に来た自分の主君」とは、もちろん自分のこととアキシユは思っている。

[11]「ダビデとその部下は、翌朝早く、ペリシテ人の地へ帰って行った。ペリシテ人はイズレエルへ上って行った」

その結果、ダビデと部下たちは同胞イスラエル人と戦うことなく、また恩義があり、信用されていたアキシユに背くことから免れ、自分たちの住んでいるペリシテ人のツィクラグの地へ帰って行くことになった。このような結果となったのも、まさに主は生きておられることのしるしであり、主が様々な局面で働いてくださり、最善の導きをしてくださったことを私たちは知るのである。→ローマ8:28

そしてまた、彼らがツィクラグへ、この時点で帰ることが、彼らの家族の危機を救うこととなるのである。→30章。